令和３年度　「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　豪雨での避難　」

山口県　上関町立上関中学校　３年　林（はやし）　友里菜（ゆりな）

８月中旬、九州地方や中国地方を中心に猛威をふるった豪雨。各地で避難勧告が出され、ニュースでは川が氾濫したり、土砂が流れている映像が放映された。私が住んでいる平生町も２、３日強い雨が降り続いた。私の家の後ろは山に面しており、いつ土砂が流れてくるか分からない危険な状況。そんな中、私たち一家は初めて避難所というところに行った。何を持っていけばいいか分からなかったし、第一、どういう場所なのか行ったこともなかったので、とても不安でいっぱいだった。いざ行ってみると、避難して来ていたのは私たちだけだった。ひどい雨だったし、避難所が開設されたことはアナウンスでもあったので、多くの人が避難してくるかと思っていた。避難したのは私たち家族だけだったので少し恥ずかしい気もしたが、逃げ遅れて死ぬよりはましだと思った。一晩で雨もやみ、あっけなく終わった避難所生活だったが、今思い返してみると、あの時避難しておいて良かったなと思う。一度避難所に行ったことで、ドキドキや不安はもうなくなった。

避難しようと言い出したのはもちろん両親で、私ではない。私は、このぐらいの雨で避難する必要なんてないのに、めんどくさいなと内心思っていた。しかし、私みたいな考えを持った人ばかりがいたら、万が一のことがあった時にはもう遅い。今回のことで私は、周りを見て、命を第一に考えて判断し避難することの大切さを身に染みて感じた。私も大人になったら一人で適切な判断をし、自分の命は自分で責任を持って守れるようになりたい。

私が避難所に一晩泊まって感じたこと。それは「他の住民たちは家にいて大丈夫なのか」ということである。周りは山しかないのにどうして誰も避難して来なかったのだろう。母は「慣れが一番危ない」と言っていた。私たち一家は引っ越して初めての豪雨だったから危機感があったものの、そこに何年、何十年も住んでいたら「このぐらいの雨だったらこの前も大丈夫だったから今回も平気だろう」と普通だったら考えてしまうのではないだろうか。それが、土砂災害を含め自然災害の恐ろしいところかもしれない。

災害から命を守るために必要なのは、常に危機感を持つことと、新しい、かつ正しい情報を仕入れることだと思う。私は母に言われて、雨が降り続いている期間は毎日、何度か天気予報を確認するようにした。ネットでは、天気、気温に加えて降水確率、降水量、雨雲レーダーで雲の動きを見ることができた。また、今回の豪雨で、平生町では何度か注意を呼びかけるアナウンスが流れた。こういった外部からの情報を聞き逃さないことも大切である。

私たち一家は避難所に行った後も、何度か室津の家にも避難した。室津にある家は、比較的山から遠いところにあり、土砂災害からは身を守ることができる。そこでの反省点は備蓄や布団がなかった点である。だから室津に行く際には、食料やタオルケットなどを持っていかないといけず大荷物だった。雨がそこまで強くなく余裕があったからまだいいが、これが切羽詰まった状況だったら、一から準備する暇もない。この反省を活かし、後日、室津の家に置いておく非常食などを買いに行った。同じご飯でも、メーカーによって消費期限が違ったので、なるべく長くもつものにした。そして次に取りかかったのが、ハザードマップの記入だ。家族で話し合い、親が不在の時の避難の仕方や危険な場所などについて確認した。ハザードマップの重要性はよくさけばれるが、実際に記入するのは初めてだったので貴重な経験になった。私は数年前まで東京で生活していた。そのため、地震のことはなんとなく理解していたが、豪雨による土砂災害、高潮、地震による津波などについてはほとんど知らなかった。それもそうだろう。東京の街中には山もないし、海もない。だからこそ、この自然豊かな山口県に引っ越してきて、自然の脅威を改めて実感している。そして、この地球で生きている以上、安全な場所はないなとも思う。

いつ、どこで起きるか予測不能な自然災害。だけれど、土砂災害などの二次災害からは、自分自身の行動によっては身を守れると思う。だから、過去の被災状況を知り、教訓をもとに今からでも、いろいろな対策や備えをしてほしい。他人ごとだと思わず、自分のことと捉えて、周りの人の命

を守るためにも、できることからやっていくことが大切だと思う。災害の多い時代だからこそ、多くの人が自分で自分の命を守れるようになったらいいなと思う。